



北海道渡島半島西部の鳥類

4. 江差町住宅地の鳥類相

玉田克巳*

北海道立総合研究機構 産業技術環境研究本部 エネルギー・環境・地質研究所 自然環境部 生態系保全グループ

〒060-0819 札幌市北区北19条西12丁目

摘要

北海道南部の檜山管内江差町の住宅地に2カ所の調査ルートを設定し、それぞれ2018年10月から2020年3月までと、2019年4月から2020年3月までの各月にラインセンサスを実施し、住宅地の鳥類相の特徴を明らかにした。住宅地の主な鳥類は、ハシボソガラス *Corvus corone*、ハシブトガラス *C. macrorhynchos*、スズメ *Passer montanus* の3種で、このほかキジバト *Streptopelia orientalis*、ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*、ツバメ *Hirundo rustica*、コムクドリ *Agropsar philippensis*、イソヒヨドリ *Monticola solitarius*、ハクセキレイ *Motacilla alba*、カワラヒワ *Chloris sinica* などが生息していたが、ムクドリ *Spodiopsar cineraceus* は少なかった。ルート沿いに空き地などがあったが、草原性鳥類はほとんど確認されなかった。

はじめに

北海道の鳥類相は、本州と異なるところがあり、本州以南には生息していないエゾライチョウ *Tetrastes bonasia*、ヤマゲラ *Picus canus*、ハシブトガラ *Poecile palustris* などが留鳥として生息し、エゾセンニュウ *Locustella fasciolata*、ノゴマ *Luscinia calliope*、オオジュリン *Emberiza schoeniclus* などが夏鳥として繁殖分布している（藤巻 2024, 日本鳥学会 2024）。また、北海道内においても地域によって分布の異なる種がいることが明らかになっており、北海道全域に生息している全域型のほかに、分布が地域に偏っている南部型、南西部型、東部型、北東型、北部型などの種があり、種によって地域的な分布状況が異なることが明らかになってきている（藤巻 2022）。渡島半島を中心とする南部型の分布を示す種は、ホトトギス *Cuculus poliocephalus* とツバメ *Hirundo rustica* の2種が

あげられている（藤巻 2022）。筆者は2019年の繁殖期（4月から7月）に、渡島半島西部の森林や草原環境でラインセンサスを実施して、鳥類相の特徴を明らかにしてきた（玉田 2023, 2024, 2025）。このうち、南部型の特徴であるホトトギスの生息状況については、落葉広葉樹林やヒノキアスナロ林では生息数はあまり少なく、出現率も低く、初認も5月下旬から6月上旬であり、飛来時期が遅いことなどを明らかにしてきた。本稿では、ツバメのおもな生息地でもある住宅地を対象に、江差町の市街地で2018年10月から2020年3月に実施したラインセンサスの結果を示し、住宅地の鳥類相の特徴を報告する。

調査地

江差町は北海道南部の渡島半島の西側に位置し、人口が6,820人（2023年現在）、面積は

キーワード：市街地, ツバメ, イソヒヨドリ, ラインセンサス

*: tamada@hro.or.jp

109.48 km²であり、北海道檜山振興局の所在地である。森林や湖沼などの面積を差し引いた可住面積は27.14 km²であるが、この可住面積は北海道内179市町村中164番目である(総務省統計局 オンライン^{*)}。日本海側に面した町で、西側には陸続きで日本海に突き出した面積約0.3km²の鷗島がある。主要産業は漁業であり、住宅地は海岸沿いの漁港周辺や郊外などにも点在するが、江差町役場、檜山振興局、商店街、住宅地などが立ち並ぶまとまった市街地エリアは、南北約5 km、東西約1 kmの範囲内にほぼ収まり、市街地の東側には森林がせまっている。

江差町の住宅地に2 kmの調査ルートを2か所設定した(図1)。調査ルートAは、江差消防

署の裏側(東側)に位置する江差町茂尻町109の交差点(41°51'39.8"N 140°07'39.2"E; WGS84, 以下同じ)を起点とし、ここから江差中学校、檜山振興局、江差町文化会館、江差茂尻郵便局、江差商工会から、道道215号線の橋本町65-1の交差点(41°51'51.4"N 140°07'27.1"E)を道沿いに、新地町、茂尻町、円山を経由して、市道まるやま袋小路との交差点(41°51'39.8"N 140°07'39.2"E)を終点とする2 kmの範囲である。調査ルートBは、檜山振興局東側の陣屋町303-17の交差点(41°51'39.8"N 140°07'39.2"E)を起点として、江差町運動公園入口、南浜町5の交差点(41°50'57.71"N, 140°07'34.65"E)を経由して、南浜町336の交差点(41°51'15.35"N, 140°

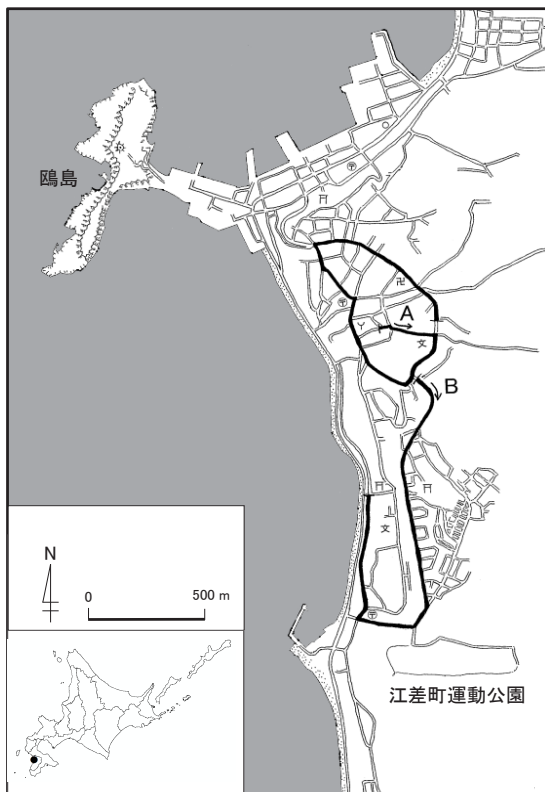


図1. 調査地及び調査ルート.

Fig.1. Study area and census routes.

07'36.3933"E) を終点とする 2 km の範囲である。ルート A は、江差町の商店街などを通るルートで、ルート沿いには住宅のほか飲食店などのビルがある。ルート B は江差町市街地の南側で、ルート周辺は、おもに住宅地であるが、ルート沿いの一部には 2014 年に廃止された JR 北海道の旧江差線の軌道跡があり、この地域は空き地になっており、高茎草本などが繁茂している。

調査ルート A は、JIS 規格で定める標準地域メッシュ (JIS X 0410 地域メッシュコード) のメッシュコード 6240-61-30 と 6240-61-20 の区域内で、調査ルート B はメッシュコード 6240-61-20 と 6240-61-10 の区域内である。

方法

調査はラインセンサス法によって実施した。ルート A は 2018 年 10 月から 2020 年 3 月までの 15 か月間実施し、ルート B は 2019 年 4 月から 2020 年 3 月までの 12 か月間実施した。両ルートともに各月 1 ～ 2 回の調査を行ったが、4 月から 7 月までの繁殖期の調査は 2019 年の 1 シーズンだけである。調査は天気予報を参考にして、荒天を避けて、晴天や曇天の日に実施するようにしたが、ルート A では、2019 年 2 月 23 日の調査中に雪が降りだし、2019 年 11 月 16 日は強い風が吹いていたが調査を実施した。今回はこれらのデータも活用した。ただ、これらの調査については、同じ月の後日に再調査を実施した。

調査には 10 倍の双眼鏡を用いて、ルートを時速約 2 km で歩きながら、確認できた鳥類を記録した。調査ルートから左右 25 m、合計 50 m の範囲内で確認できた鳥類を種ごとに個体数を集計した。25 m より外側あるいは調査終了後に確認した鳥類については種名のみを記録した。また、ハシボソガラス *Corvus corone*、ハ

シブトガラス *C. macrorhynchos*、スズメ *Passer montanus* の 3 種については、左右 25 m 内で観察できた群れサイズも記録した。

調査の時間帯は、4 月から 8 月までは早朝に行い、7:30 までに調査が終了するように実施した。また 1 月から 3 月、9 月から 12 月の調査は、おおむね午前中に実施した。ただし、ルート B で実施した 2019 年 12 月 15 日の調査だけは、調査終了時刻が 12:35 であった。

鳥類相の特徴を調べるために、調査期間を繁殖期 (4 ～ 7 月) と非繁殖期 (1 ～ 3 月と 8 ～ 12 月) の 2 時期に分けた。各時期の出現率は、25 m より外側で確認できたものも加えて、種ごとに確認した日数を調査日数で割り返して算出した。

なお、飛翔中で種が特定できなかったカモ科鳥類はカモ科 (*Anatidae* sp.) として集計した。また、アカゲラ *Dendrocopos major* とオオアカゲラ *D. leucotos* は、鳴き声から種を判定することができないので、声だけを確認したものはアカゲラ属 (*Dendrocopos* sp.) とした。

結果および考察

今回の調査では、全体で 45 種の鳥類が確認でき、このほかに種が同定できなかったカモ科とアカゲラ属の鳥類が確認された。繁殖期の調査結果を表 1 に、非繁殖期のうちルート A の調査結果を表 2 に、ルート B の調査結果を表 3 に示す。繁殖期と非繁殖期を通して、ルート A では 40 種、ルート B では 32 種の鳥類が確認された。

繁殖期のルート A では、キジバト *Streptopelia orientalis*、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*、ツバメ、ウグイス *Horornis diphone*、スズメ、カワラヒワ *Chloris sinica* の 8 種の出現率が 100% で、ルート B ではハシボソガラス、ハシブトガラス、ウ

表 1. 調査ルート A と B で確認された 2019 年の繁殖期 (4-7 月) の鳥類 (羽 /2 km). * は 25 m より外側で確認されたもの. 月の下に示した数字は調査日を示す.

Table 1. Census results during the 2019 breeding season (April to July) on routes A and B (number of birds per 2 km). Asterisks indicate birds recorded outside 25 m. Figures below the months indicate survey dates.

種名 Species name	A							B							出現率
	Apr. 18	May 5 22	June 11 19	July 10 26			出現率	Apr. 19	May 5 22	June 11 19	July 10 30			出現率	
カルガモ <i>Anas zonorhyncha</i>		*					14.3							0.0	
アマツバメ <i>Apus pacificus</i>					4		14.3							0.0	
ツツドリ <i>Cuculus optatus</i>			* *	*			42.9				*			14.3	
キジバト <i>Streptopelia orientalis</i>	1	* 1	1 *	* *	*		100.0		3 *	2 1				57.1	
ウミネコ <i>Larus crassirostris</i>							0.0			*		*		28.6	
オオセグロカモメ <i>Larus schistisagus</i>	*	*			1		42.9	7	*	*		1		57.1	
アオサギ <i>Ardea cinerea</i>		*					14.3			*				14.3	
ミサゴ <i>Pandion haliaetus</i>							0.0					1		14.3	
コゲラ <i>Yungipicus kizuki</i>					1		14.3							0.0	
アカゲラ <i>Dendrocopos major</i>					1		14.3							0.0	
ヤマゲラ <i>Picus canus</i>					*		14.3							0.0	
ハヤブサ <i>Falco peregrinus</i>					*	1	28.6							0.0	
モズ <i>Lanius bucephalus</i>					1		14.3	*	1 1	4 2	*			85.7	
ハシボソガラス <i>Corvus corone</i>	4	2 1	3 2	*	3		100.0	4	2 *	4 1	1 10			100.0	
ハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos</i>	3	2 2	* 3	2 15			100.0	2	1 1	3 *	* 23			100.0	
シジュウカラ <i>Parus cinereus</i>		* *	1		*	2	71.4							0.0	
ヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis</i>	1	6 *	4 *	*	*	1	100.0		2 *	* 1	*			71.4	
ツバメ <i>Hirundo rustica</i>	2	2 2	4 5	1 9			100.0			* 3				28.6	
ウグイス <i>Horornis diphone</i>	*	* *	* *	* *	*	*	100.0	*	* *	* *	* *	*	*	100.0	
ムクドリ <i>Spodiopsar cineraceus</i>					8		14.3				2			14.3	
コムクドリ <i>Agropsar philippensis</i>		11 7	8 26	2			71.4		6 5	5 4	47 1			85.7	
アカハラ <i>Turdus chrysolaus</i>		*					14.3							0.0	
ツグミ <i>Turdus eunomus</i>	2						14.3	*						14.3	
イソヒヨドリ <i>Monticola solitarius</i>		2 *	1		*		57.1			* *	2			42.9	
スズメ <i>Passer montanus</i>	42	46 17	23 15	24 31			100.0	14	10 16	22 16	37 25			100.0	
ハクセキレイ <i>Motacilla alba</i>	2	* *	2		2 5		85.7	5 1		1 3	1 5			85.7	
カワラヒワ <i>Chloris sinica</i>	5	6 4	1 5	2 1			100.0	4	*	2 *	1			71.4	
ホオジロ <i>Emberiza cioides</i>					*		14.3							0.0	
ホオアカ <i>Emberiza fucata</i>							0.0				*			14.3	
ドバト <i>Columba livia</i>		*					14.3	6		4	13 37			57.1	

ゲイス, スズメの 4 種が 100%であった。このうち, 繁殖期のウグイスの確認は, ルート A, B とともに 25 m より外側で, さえずりを確認したものである。ウグイスは非繁殖期においても住宅にある庭の藪で地鳴きする個体を目視したことがあったが (ルート A; 2019 年 10 月 19 日), 繁殖期は住宅地には生息しておらず, 周辺の森林などに生息していたものと思われる。ウグイスを除く, ハシボソガラス, ハシブトガ

ラス, スズメの 3 種が繁殖期と非繁殖期を通じて出現率が高く, この 3 種が江差町の市街地や住宅地に生息する主要な種である。スズメについては, 繁殖期 (4 ~ 7 月) の確認個体数も 10 ~ 46 羽が観察され, 個体数の視点からも主要な種と考えられる。このほか, 繁殖期に出現率が 50%を超えていた種は, 出現率が高い順番に, ルート A ではハクセキレイ *Motacilla alba* (85.7%), シジュウカラ *Parus cinereus* (71.4

表 2. 調査ルート A で確認された非繁殖期（1-3 月，8-12 月）の鳥類（羽 /2 km）. * は 25 m より外側で確認されたもの. 月の下に示した数字は調査日を示す.

Table 2. Census results during the non-breeding season (January to March and August to December) on route A (number of birds per 2 km). Asterisks indicate birds recorded outside 25 m. Figures below the months indicate survey dates.

種名 Species name	2018				2019											2020			出現率
	Oct.	Nov.	Dec.		Jan.	Feb.	Mar.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	Jan.	Feb.	Mar.				
	8	20	25	15	19	23	24	21	25	26	19	16	30	15	11	11	14		
キジバト <i>Streptopelia orientalis</i>		*						*										11.8	
オオセグロカモメ <i>Larus schistisagus</i>					*		*		*					*	*		*	35.3	
トビ <i>Milvus migrans</i>			*	1			*							*	*			29.4	
オオウシ <i>Haliaeetus pelagicus</i>					*													5.9	
オジロウシ <i>Haliaeetus albicilla</i>							*							*				11.8	
ノスリ <i>Buteo japonicus</i>					*									*				11.8	
コガラ <i>Yungipicus kizuki</i>																	1	5.9	
アカガラ <i>Dendrocopos major</i>	*										1			1				17.6	
ハヤブサ <i>Falco peregrinus</i>																1		5.9	
ミヤマガラス <i>Corvus frugilegus</i>														1				5.9	
ハシボソガラス <i>Corvus corone</i>	7	3	1	8	7	3	7	7	*	4	3	2	2	26	11	7	2	100.0	
ハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos</i>	5	2	3	2	2	2	2	1	3	5	13	*	*	6	1	2	*	100.0	
ヒレンジャク <i>Bombycilla japonica</i>																18		5.9	
ヒガラ <i>Periparus ater</i>														1				5.9	
ヤマガラ <i>Sittiparus varius</i>	1								1				2	2				23.5	
シジュウカラ <i>Parus cinereus</i>			*	1				*			1	2	5	8	8		*	52.9	
ヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis</i>		2			*	*		2	*		*			1	*	4	5	58.8	
ツバメ <i>Hirundo rustica</i>									2									5.9	
イワツバメ <i>Delichon dasypus</i>										6								5.9	
ウグイス <i>Horornis diphone</i>	*										1							11.8	
メジロ <i>Zosterops japonicus</i>			*															5.9	
スズメ <i>Passer montanus</i>	18	17	8	57	42	5		15	28	21	18	70	52	94	1	21	18	94.1	
キセキレイ <i>Motacilla cinerea</i>									1									5.9	
ハクセキレイ <i>Motacilla alba</i>	3	*							3	4	3							29.4	
シメ <i>Coccothraustes coccothraustes</i>														1			*	11.8	
カワラヒワ <i>Chloris sinica</i>								3		*								11.8	
イスカ <i>Loxia curvirostra</i>														12				5.9	
ドバト <i>Columba livia</i>									*									5.9	
カモ科 <i>Anatidae</i> sp.								*										5.9	

%), コムクドリ *Agropsar philippensis* (71.4%), イソヒヨドリ *Monticola solitarius* (57.1%) の 4 種で, ルート B ではモズ *Lanius bucephalus* (85.7%), コムクドリ (85.7%), ハクセキレイ (85.7%), ヒヨドリ (71.4%), キジバト (57.1%), オオセグロカモメ *Larus schistisagus* (57.1%) ドバト *Columba livia* (57.1%) の 7 種で, 両ルートで共通して出現率が高かったものはハシボソガラス, ハシブトガラス, スズメ

の 3 種のほかに, キジバト, ヒヨドリ, コムクドリ, ハクセキレイであった. 北海道南部の函館市の住宅地約 74.5ha で, 繁殖するすべての鳥類の巣数を調べた Mikami *et al.* (2024) では, 14 種の巣が確認されたが, スズメが 108 巣 (密度は 1.45 巣/ha) であるのに対して, ほかの 13 種は 1 ~ 10 巣 (0.01 ~ 0.13 巣/ha) であった. 函館市においてもスズメは巣数が特に多く, 住宅地で繁殖する主要な種である. 帯広

表 3. 調査ルート B で確認された非繁殖期（1-3 月，8-12 月）の鳥類（羽 /2 km）. * は 25 m より外側で確認されたもの. 月の下に示した数字は調査日を示す.

Table 3. Census results during the non-breeding season (January to March and August to December) on route B (number of birds per 2 km). Asterisks indicate birds recorded outside 25 m. Figures below the months indicate survey dates.

種名 Species name	2019					2020			出現率
	Aug. 26	Sep. 28	Oct. 20	Nov. 30	Dec. 15	Jan. 11	Feb. 11	Mar. 14	
キジバト <i>Streptopelia orientalis</i>	*								12.5
アオバト <i>Treron sieboldii</i>	2								12.5
ウミネコ <i>Larus crassirostris</i>			*						12.5
オオセグロカモメ <i>Larus schistisagus</i>	*	*	3		*	*	*	*	87.5
ウミウ <i>Phalacrocorax capillatus</i>	*	*							25.0
アオサギ <i>Ardea cinerea</i>	1	1							25.0
トビ <i>Milvus migrans</i>				*		*			25.0
オジロワシ <i>Haliaeetus albicilla</i>							*		12.5
ノスリ <i>Buteo japonicus</i>					1	1			25.0
アカゲラ <i>Dendrocopos major</i>							1		12.5
ハヤブサ <i>Falco peregrinus</i>	*								12.5
モズ <i>Lanius bucephalus</i>	*								12.5
ハシボソガラス <i>Corvus corone</i>	4	*	4	4	6	8	7	2	100.0
ハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos</i>	4	9	7	4	1	2	1	4	100.0
ヒガラ <i>Periparus ater</i>							1		12.5
ヤマガラ <i>Sittiparus varius</i>		4				1			25.0
シジュウカラ <i>Parus cinereus</i>		1	3	1			2	3	62.5
ヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis</i>		*	2			*		1	50.0
ツバメ <i>Hirundo rustica</i>	3								12.5
メジロ <i>Zosterops japonicus</i>		*							12.5
ムクドリ <i>Spodiopsar cineraceus</i>	30								12.5
イソヒヨドリ <i>Monticola solitarius</i>	*								12.5
スズメ <i>Passer montanus</i>	26	63	31	30		61	53	28	87.5
ハクセキレイ <i>Motacilla alba</i>	2	1							25.0
カワラヒワ <i>Chloris sinica</i>		4	*						25.0
ドバト <i>Columba livia</i>	33	21	31		4			24	62.5
アカゲラ属 <i>Dendrocopos</i> sp.					1	*	1		37.5

市の市街地から農地が多い郊外において繁殖期に調査を行い，鳥類の生息状況と植被率との関係を調べた藤巻（1981）によれば，植被率が 10% 以下の住宅都市部ではハシボソガラス，スズメ，ハクセキレイ，カワラヒワ，ドバトなどが主要な種であり，キジバトやコムクドリは植被率が低い 11 ～ 20% で出現する．今回の調査では，植被率は調べていないが，江差町の住宅地に生息する主要な鳥類は，おおむね帯広

市で植被率が低い地域に生息するものと一致する．帯広市ではハシボソガラスの生息数が多く，ハシブトガラスは少ない（玉田・藤巻 1993）．また，北海道ではヒヨドリの生息状況は東部の釧路地方で特に低く，十勝地方が東限と言われている（Brazil 1991，藤巻 2004）．ハシブトガラスとヒヨドリが江差町で多く，帯広市の調査（藤巻 1981）であまり確認されなかったことは，背景にこの 2 種の生息状況の地域差があ

表 4. ハシボソガラス, ハシブトガラス, スズメの群れサイズの年変化.

Table 4. Annual changes in flock size of *Corvus corone*, *C. macrorhynchos*, and *Passer montanus*.

種名		群れサイズ Flock Size											全群数 Total number of flocks	1-2羽の群れの割合(%) Percentage of flocks with 1-2 birds (%)
		1	2	3	4	5	6-10	11-20	21-30	31-40	41-50	51-60		
ハシボソガラス <i>Corvus corone</i>	Jan.	14	2	1		1							18	89
	Feb.	14	3		1								18	94
	Mar.	5	3										8	100
	Apr.	6	1										7	100
	May	5											5	100
	June	3	3										6	100
	July	7					1						8	88
	Aug.	2	1										3	100
	Sep.	2	1										3	100
	Oct.	13	2										15	100
	Nov.	5	2										7	100
	Dec.	6	4	2		1		1					14	71
ハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos</i>	Jan.	5											5	100
	Feb.	5	1										6	100
	Mar.	3	1										4	100
	Apr.	1	2										3	100
	May	4	1										5	100
	June	4	1										5	100
	July	9	2	1	1	1	2						16	69
	Aug.	3	2										5	100
	Sep.	5	3	1									9	89
	Oct.	11	1			1	1						14	86
	Nov.	4	2										6	100
	Dec.	3	3										6	100
スズメ <i>Passer montanus</i>	Jan.	1		1	1						1	1	5	20
	Feb.	5	5	3			1	1	1				16	63
	Mar.	9	13	2	2	1	1						28	79
	Apr.	8	12	2	2	2							26	77
	May	36	20	1	1		1						59	95
	June	33	12	3	1	1							50	90
	July	43	10	5	1	2	2	1					64	83
	Aug.	16	10	3	1	1		0					31	84
	Sep.	9	2	4	3	1		3					22	50
	Oct.	18	14	8	1	2							43	74
	Nov.	3	3		2	1	3	3	1		1		17	35
	Dec.	1	2				2		3			1	9	33

ると考えられる.

ハシボソガラス, ハシブトガラス, スズメの群れサイズをみると(表4), ハシボソガラスは1羽か2羽で確認されることが多く(各月に確認される群の71%以上), 3羽以上の群れは1~2月, 7月, 12月だけで観察され, 12月には最大15羽の群れが観察された. ハシブトガラスも1羽か2羽で確認されることが多く(各月に確認される群の86%以上), 3羽以

上の群れが確認されたのは7月, 9月, 10月だけであった. 一方でスズメは, 3月から8月と10月は1羽か2羽で観察されることが多いが(各月に確認される群の74~95%), 4月から7月の繁殖期においても5羽以上の群れが観察された. しかし冬季の1月, 11月, 12月に1~2羽の群れが少なくなり(各月に確認される群の20~33%), 40羽より多い群れも目撃された. これらの大きい群れは, 住宅

地内でエサ台を設置している場所や、枯れ草などが繁茂して埒になっていると思われる場所で目撃された。ラインセンサスで確認されたスズメの個体数は、繁殖期（4～7月）には10～46羽が確認されているが（表1）、非繁殖期は0～94羽で（表2と3）、非繁殖期には多くの個体が観察されることもあるが、まったく観察されないことが2回あった（Aルートの2019年2月24日とBルートの2019年12月15日）。これはスズメが冬季に群れで行動することが多くなり、調査中に群れと遭遇すると多くの個体が確認されるが、群れに遭遇しないと確認できないことが原因であると考えられる。

コムクドリは、今回の住宅地の両調査ルートのほかに、厚沢部川の堤防上に設定した調査ルートにおいてもよく確認されていた（玉田2024）。厚沢部川堤防上の調査ルートは、堤内にヤナギ科 *Salicaceae* の植物やケヤマハンノキ *Alnus hirsuta* などを主体とする河畔林が発達していて、堤防の外側はおもに水田や畑などの農耕地が広がっている。川沿いの堤防上は草原環境であるが、調査ルートの周辺も含む環境は、藤巻（2022）などで区分されている農耕地・林（農耕地内に林がある環境）に近い環境である。藤巻（1998）では、繁殖期のコムクドリは森林には生息せず、農耕地・林、農耕地、住宅地に多く生息するとされている。江差町において、住宅地でコムクドリが多く、厚沢部川堤防上の調査ルートにおいても多かったことは、北海道の広域で繁殖期のコムクドリの生息状況を調べた藤巻（1998）の見解と一致する。ただ、藤巻（1998）では、ムクドリ *Spodiopsar cineraceus* が繁殖期に生息する環境もコムクドリと似通っていて、生息状況に違いがないとしているが、今回の江差町住宅地の調査では、ムクドリはルートAでは2019年7月10日に8羽の群れを1回だけ観察したことで、ルートB

では、2019年7月10日に2羽の群れを1回と、8月26日に15羽の群が2回確認されただけで、ムクドリの観察頻度は少なかった。繁殖期のなかでも、営巣期に相当する4～6月に確認されなかったことから、調査ルート沿いの住宅地では繁殖していなかった可能性がある。

帯広市の住宅地ではヒバリ *Alauda arvensis*、コヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps*、ノビタキ *Saxicola stejnegeri* が多いことも報告されている（穴田・藤巻1984）。帯広市の住宅地内の空き地には草本類が生育しており、これら鳥類はこのような環境に生息していたとされている（穴田・藤巻1984）。今回調査を行ったルートBでは、廃線になったJR北海道の旧江差線の軌道跡が空き地になっており、高茎草本などが繁茂していた。またルートAにおいても、小規模ではあるが空き地はあった。しかし、草原や灌木草原に生息する鳥類で観察されたのはモズと、25 mより外側でホオジロ *Emberiza cioides* とホオアカ *E. fucata* が確認されただけであり、ヒバリ、コヨシキリ、ノビタキなどの草原性鳥類は確認されなかった。函館市内を流れる亀田川の河川環境と住宅地の鳥類を調べた中川ほか（2017）においても、エゾセンニュウ、ホオアカ、アオジ *E. personata* は確認されているが、ヒバリ、コヨシキリ、ノビタキなどの草原性鳥類は確認されていない。北海道南部では、住宅地内に空き地があって、小規模な草原環境が存在している、ヒバリ、コヨシキリ、ノビタキなどの草原性鳥類は生息しないと考えられる。

今回の調査で、ツバメは繁殖期に両ルートで確認された。ツバメは、渡島半島などの北海道南部では普通に生息し、北海道では南部型の分布を示す鳥の一つである（藤巻2022）。渡島半島などでは市街地や農耕地に生息するとされている（藤巻2024）。今回の調査においても市街地で確認されたほか、渡島半島西部の草原

環境を調べた玉田（2024）では、厚沢部川の堤防上に設定した調査地で、繁殖期（5～7月）の出現率が100%であったほか、厚沢部川河口部近くの海岸草原の調査ルートにおいても出現率が40%であった。今回の調査では、繁殖期にはルートAで出現率が100%であったのに対し、ルートBでは28.6%で、ルートによる出現率の違いがあった。おもに本州以南の観察例と思われる小海途・和田（2011）や内田（2019）では、ツバメは商店や民家のような、人の出入りの多い場所を好む傾向があるとされている。今回の調査結果から、江差町においても商店街を通るルートAで多く確認され、おもに住宅地を通るルートBで少なかったことは、人の出入りの多い場所を好む本州以南の傾向と共通することで、住宅地が多いルートBでは、ツバメが営巣環境として好む安全な軒先が少ないことなどが考えられる。また玉田（2024）において、厚沢部川の堤防上や海岸草原でよく観察されたことは、これらの地域が市街地から近く、ツバメの餌場になっていた可能性がある。このほか、今回は、農耕地ではラインセンサスを実施していないが、ツバメは畜産農家の近くにおいてもよく観察された（玉田 未発表）。2019年における江差町のツバメの初認は4月13日であった（江差町字茂尻；玉田 未発表）。函館地方気象台の生物季節観測による2019年の「つばめの初見日」は4月8日で（函館市美原で確認；函館地方気象台 オンライン²⁾）、江差町の初認日は函館市より5日遅かった。今回の調査ではツバメの終認はルートBの8月26日であったことから、江差町におけるツバメの生息時期は、4月中旬から8月下旬であった。

イソヒヨドリの出現率は、ルートAでは57.1%、ルートBでは42.9%であった。調査では、5月5日にルートAで最初に観察され、最後の確認はルートBで8月26日であった。北海道

ではイソヒヨドリは夏鳥で、海岸部に生息しており、北部や東部では多くないとされているが（藤巻 2024）、本州では留鳥である（日本鳥学会 2024）。江差町の西側に突き出した鷗島においては、2020年1月7日にイソヒヨドリの雄の観察情報があった（荒井一実私信）。このことから、イソヒヨドリは、一部の個体がここで越冬している可能性がある。今回は、5月22日の調査終了後に、ルートAの調査コース沿いにおいて雌雄が観察され、メスが住宅屋根の軒にできた穴に数回出入りする行動が確認されたことから、ここに巣があった可能性がある。イソヒヨドリは、本州において近年内陸部の都市に分布が拡大していることが報告されている（西 2012, 鳥居・江崎 2014）。江差町は海岸に面した街であり、今回の調査地域は住宅地であるが、海岸に近い地域でもある。江差町の住宅に営巣していた可能性があることは、この種が北海道においても住宅環境に適応していることのひとつと考えられる。北海道では、イソヒヨドリは日本海側に多く、1974－1978年の鳥類繁殖分布では南西部の檜山地方や後志地方に分布が集中しており、日高地方では1か所の観察記録がある程度で、オホーツク海側には観察記録はなかった（環境庁 1979）。しかし、1997－2002年には日本海側の観察記録が北側に広がり、オホーツク海側でも記録されている（環境省 2004）。また、2004年7月の調査では、知床岬のオホーツク海側でもメスのイソヒヨドリが観察されている（玉田 2007）。2016－2021年の繁殖分布調査では、1997－2002年と同様に、日本海側北部やオホーツク海側においてイソヒヨドリが確認されている（植田・植村 2021）。しかし、1974年以降実施された3回の繁殖分布調査において、イソヒヨドリは北海道東部の太平洋側では確認されていない（環境庁 1979, 環境省 2004, 植田・植村 2021）。

近年では、イソヒヨドリの分布は日本海側北部やオホーツク海側にも拡大しているが、もともとの分布は、檜山地方や後志地方など、北海道南部の日本海側だけであり、イソヒヨドリも南部型の鳥類であった可能性がある。

このほかルート B では、オオセグロカモメ、ドバトなどの出現率が高かった。江差町は海岸に面した街で、オオセグロカモメは市街地の上空をよく飛翔する。またルート B の後半から終点までの約 600 m の範囲は、海岸から 70 ～ 80 m の地域である。ルート B が海岸に近いルートであったことから、オオセグロカモメがよく観察されたものと考えられる。ルート B 沿いには神社の鳥居があり、ドバトの群れがここでよく確認されたことと、終点の近くでレース鳩を飼育している住宅があり、この近くでよく観察されたものである。

今回の調査では、猛禽類についてもいくつかの種が確認された。ミサゴ *Pandion haliaetus* とハヤブサ *Falco peregrinus* は繁殖期の 7 月に、オオワシ *Haliaeetus pelagicus*、オジロワシ *H. albicilla*、ノスリ *Buteo japonicus*、ハヤブサは非繁殖期に確認された。ハヤブサはルート A 沿いにある、高さ約 50 m の NTT の鉄塔にとまっているところを目撃したものである。おそらく、江差町市街地近くの高食崖に営巣していたものと思われる。調査以外の時期において、この NTT の鉄塔の下で、ハヤブサの餌動物になったと思われるアオバト *Pandion haliaetus* などの羽毛を拾うことがよくあった。高食崖に営巣していたハヤブサが、江差町の市街地も行動圏の一部としていたものと思われる。ミサゴは上空を飛翔したところを目撃したものである。今回は、江差町では営巣は確認できなかったが、過去には江差町北部の伏木戸の立岩（6240-61-81）で営巣中のヒナが確認されていて（北海道檜山振興局 オンライン³⁾）、隣接する上ノ国町

原歌（6240-50-67）では、2019 年 3 月 30 日につがいと思われる 2 羽が高食崖の岩の上にいるところが目撃され、近くの海上にある独立岩上にほぼ完成した巣が確認された（玉田 未発表）。檜山地方の高食崖は良い営巣地になっていると思われる。冬季に確認したオオワシ、オジロワシ、ノスリ、ハヤブサはいずれも上空を飛翔していたものである。海岸に面した江差町は、これらの猛禽類の、冬季の行動圏の一部になっていたものと思われる。

北海道の住宅地や都市部に生息する鳥類としてはハシボソガラス、ハシブトガラス、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワなどで、公園、社寺林、庭の存在により森林性鳥類が、草本類が繁茂する空き地の存在によってヒバリ、コヨシキリ、ノビタキなどの草原性鳥類が生息できるようになるとされている（藤巻 1981, 2024, 穴田・藤巻 1984, 藤巻・戸田 1981）。江差町の住宅地で調査を行った今回の結果から、渡島半島西部の住宅地の鳥類の特徴としては、帯広市などの北海道内のほかの住宅地に比べると、ツバメとイソヒヨドリが加わる一方で、空き地などの小規模な草原環境があっても、ヒバリ、コヨシキリ、ノビタキなどの草原性鳥類は生息しない。住宅地周辺にコムクドリは生息していたが、ムクドリが少なかった。江差町の市街地は、海岸に近いことから、オオセグロカモメなどの海鳥や、近くの高食崖で繁殖するハヤブサやミサゴが飛来することや、冬季にはオオワシ、オジロワシ、ノスリなどの猛禽類が街の上空を飛翔する。これらが江差町市街地の鳥類相の特徴であると考えられる。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、北海道檜山振興局保健環境部環境生活課自然環境係の荒井一実係長（2019 年当時）にはイソヒヨドリの冬季の生息情報をご教

示いただいた。また、三上かつら副編集長と匿名の2名の査読者には多大な助言や協力をいただいた。記してお礼申し上げる。

引用文献

- 穴田哲・藤巻裕蔵. 1984. 帯広市における農耕地と住宅地の繁殖期の鳥相. *Strix* 3: 19-27.
- Brazil, M. A. 1991. *The Birds of Japan*. Christopher Helm, London.
- 藤巻裕蔵. 1981. 北海道十勝地方の鳥類. 3. 帯広市における植被と鳥類の関係. *山階鳥研報* 13: 50-60.
- 藤巻裕蔵. 1998. 北海道中部・南東部におけるコムクドリとムクドリの生息状況. *帯大研報* 20: 245-252.
- 藤巻裕蔵. 2004. 北海道中部・南東部におけるヒヨドリの繁殖期の生息状況. *Strix* 19: 1-9.
- 藤巻裕蔵. 2022. 北海道における鳥類の繁殖期の分布. *日鳥学誌*. 71: 121-135.
- 藤巻裕蔵. 2024. 北海道鳥類目録改訂5版. 極東鳥類研究会, 美唄.
- 藤巻裕蔵・戸田敦夫. 1981. 北海道十勝地方の鳥類 2. 帯広市の都心部とその周囲の鳥類. *山階鳥研報* 13: 183-195.
- 環境庁. 1979. 第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(鳥類) 全国版 (昭和53年度調査). 環境庁, 東京.
- 環境省. 2004. 第6回自然環境保全基礎調査 種の多様性調査 鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- 小海途銀次郎・和田岳. 2011. *日本 鳥の巣図鑑—小海途銀次郎コレクション—*. 東海大学出版会, 秦野.
- Mikami, OK., Kiyohara, K., & Mogi, K. 2024. Effects of artificial and natural substrates on breeding birds in a Japanese city. *Ornithol. Sci.* 23: 27-33.
- 中川優奈・三上かつら・三上修. 2017. 河川が都市の鳥類多様性に与える影響: 函館市亀田川の実例. *日鳥学誌*. 66: 133-143.
- 日本鳥学会. 2024. 日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.
- 西教生. 2012. イソヒヨドリの山梨県初繁殖記録. *山階鳥類学雑誌* 43: 194-196.
- 玉田克巳. 2007. 知床半島先端部の海岸台地における草原性鳥類. *Strix* 25: 119-124.
- 玉田克巳. 2023. 北海道渡島半島西部の鳥類 1. 落葉広葉樹林における繁殖期の鳥類相. *Strix* 39: 59-74.
- 玉田克巳. 2024. 北海道渡島半島西部の鳥類 2. 草原環境における繁殖期の鳥類相. *Strix* 40: 61-71.
- 玉田克巳. 2025. 北海道渡島半島西部の鳥類 3. ヒノキアスナロ林における繁殖期の鳥類相. *Strix* 41: 47-56.
- 玉田克巳・藤巻裕蔵. 1993. 帯広市とその周辺におけるハシボソガラスとハシブトガラスの繁殖生態. *日鳥学誌*. 42: 9-20.
- 鳥居憲親・江崎保男. 2014. イソヒヨドリのハビタットとその空間構造—内陸都市への進出—. *山階鳥類学雑誌* 46: 15-24.
- 内田博. 2019. 日本産鳥類の卵と巣. まつやま書房, 東松山.
- 植田睦之・植村慎吾. 2021. 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本鳥の今を描こう 2016-2021年. 鳥類繁殖分布調査会, 東京.

オンラインドキュメント

- *1) 総務省統計局. 2025. 統計でみる市町村のすがた 2025. <https://www.stat.go.jp/data/s-sugata/pdf/all_shi.pdf>. 参照日2025年7月25日
- *2) 函館地方気象台. 生物季節観測検索(つばめの初見日/函館地方気象台). <https://agora.ex.nii.ac.jp/cgi-bin/cps/report_each.pl?id=d889b4ec-6c64-3c76-b6cd-ee9bfc0d0c85>. 参照日2025年8月7日
- *3) 北海道檜山振興局. かもめ島野鳥観察記録_観察記録類末記_第8回 雄々しき翼 猛禽類たち. <https://www.hiyama.pref.hokkaido.lg.jp/hk/kks/sizen/sizen/birdwatching-record-in-kamomejima-column_8.html>. 参照日2026年1月8日

Birds of the Western Oshima Peninsula, Southwestern Hokkaido

4. Avifauna of a residential area in Esashi Town

Katsumi Tamada*

Nature Conservation Research Division, Research Institute of Energy,
Environment and Geology, Industrial Technology and Environment Research Department,
Local Independent Administrative Agency, Hokkaido Research Organization
Kita-19, Nishi-12, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0819, Japan.

To clarify the characteristics of the avifauna in residential areas of Esashi Town, two survey routes were established and line transect censuses were conducted. Routes A and B were surveyed from October 2018 to March 2020 and from April 2019 to March 2020, respectively. Three species—the Carrion Crow *Corvus corone*, the Large-billed Crow *C. macrorhynchos*, and the Eurasian Tree Sparrow *Passer montanus*—were the dominant residential species in the town. The Oriental Turtle Dove *Streptopelia orientalis*, the Brown-eared Bulbul *Hypsipetes amaurotis*, the Barn Swallow *Hirundo rustica*, the Chestnut-cheeked Starling *Agropsar philippensis*, the Blue Rock Thrush *Monticola solitarius*, the White Wagtail *Motacilla alba*, and the Oriental Greenfinch *Chloris sinica* were also common. Although some open grassy areas existed along the survey routes, typical grassland birds such as the Eurasian Skylark *Alauda arvensis* and the Amur Stonechat *Saxicola stejnegeri* were absent. The Barn Swallow was common along the route that passed through the shopping district, but only a few individuals were recorded along the route through the single-family residential areas. Raptors were occasionally observed during both the breeding and non-breeding seasons.

Keywords: Urban, *Hirundo rustica*, *Monticola solitarius*, line transect census

*: tamada@hro.or.jp